様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：６４３０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２００９６

研究課題名（和文）日本中世仏教の思惟方法の比較思想史的研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Ways of Thinking in Medieval Japanese Buddhism

研究代表者
末木　文美士（SUEKI, FUMIHIKO）

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：９０１１４５１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本中世仏教の思惟方法を検討し、それを他の諸思想と比較し、現代的意味を探ることを目的とした。具体的には、（1）真福寺などに写本で伝えられる文献を調査し、その思想内容を分析した。（2）平成２４年度には研究会を開催し、仏教研究者のみならず、現代哲学研究者も出席して、広い視野からの比較研究を進めた。（3）平成２５年度には、中日仏学会議（北京）、世界哲学会議（アテネ）に出席して、成果を発表した。（4）比較研究を進めるために、Bernard Faureの著作Unmasking Buddhismを和訳するとともに、拙著『浄土思想論』の中国語訳、『仏教vs.倫理』の英訳を作成した。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to investigate the thinking way of medieval Japanese Buddhism and find its contemporary meaning by way of comparing it with other thoughts. In order to attain these aims, the following research activities were carried out: 1) Investigation of the medieval manuscripts preserved at Shimpuku-ji temple in Nagoya and other temples. 2) Having research meetings in 2012, inviting both Buddhist scholars and philosophers. 3) Attending and reading papers at the China-Japan research conference on Buddhism in Beijin and at the International Conference of Philosophy in Athen in 2013. 4) Japanese translation of Bernard Faure’s Unmasking Buddhism, Chinese translation of Sueki’s Essays on Pure Land Buddhism and English translation of Sueki’s Buddhism vs. Ethics.

研究分野：思想史

キーワード：仏教　日本中世　比較思想

１．研究開始当初の背景

近年、日本仏教の研究は大きく変わりつつある。かつての日本仏教研究は、いわゆる鎌倉新仏教が、純粋浄土教や純粋禅を発展させ、それが日本仏教の最高峰であり、主流であると考えられてきた。黒田俊雄による顕密体制論の創唱（『日本中世の国家と宗教』、1975）により、顕密仏教が中世仏教の主流として注目を浴びるようになった。特に 1990 年代以後、密教の重要性が認識され、その研究が盛んになってきた。

研究代表者の末木もまた、そのような資料研究に従事してきたが、特に禅と密教の関係を中心に研究を進めてきた。その過程で、従来の純粋禅や純粋浄土教をモデルとした理論では、理解できないところが大きいことがわかってきた。従来の仏教理解は、純粋禅や純粋浄土教を合理的、近代的な立場から評価することがなされてきた。しかし今日、近代化論が行き詰るとともに、このような評価が再検討されなければならなくなり、むしろ禅・念仏・神道などと密教の習合に見られるような中世的な発想の再評価を広い視野から行うことが不可欠の課題となってきた。

２．研究の目的

以上のような中世的な発想を理解するためには、欧米における近代思想への反省の動向を踏まえ、新しい解釈の枠組みを作ることが必要である。ただし、漠然と欧米のポスト近代思想を流行的に模倣するということではなく、オリエンタリズム以後、欧米において近年近代のアジア思想研究への反省に立つ、新しいアジア思想研究に配慮し、日本の中世的発想を、現代という場でどのように解釈できるか、という観点からの新しい解釈が不可欠である。本研究は、このような課題に対応するために、日本中世の仏教的思惟方法を解釈する新しい思想的枠組みを比較思想史的な観点から探求しようとしてはじめられた。

３．研究の方法

(1)儀礼研究　今日の欧米の仏教研究は、抽象的な思想研究に留まらず、それを儀礼の実践の場に引き戻して具体性を確保する方向に向かっている。Bernard Faure, Robert Sharf, Lucia Dolce などの研究がもっとも進んでおり、密教を重視する観点からは、このような儀礼研究はきわめて重要である。

(2)非合理的言語の哲学的解明　仏教的な論理として、以前から鈴木大拙の「即非の論理」などが提唱されてきた。これは、仏教においては、「Ａは非Ａである」という矛盾律に反する論理が成り立つと主張するもので、今日でもある有効性を持っている。しかし、今日の言語哲学の研究はそれよりもさらに大きく進展しており、それを参照する必要がある。

(3)思惟方法の比較研究　比較思想は、思想の類型を立てて比較するという方法を中心として進められてきた。しかし、今日、過去のような地域を固定して比較するような方法は成り立たなくなっている。それを超えてどのような比較方法が可能か、検討が必要である。

具体的に、以下のような方法を用いた。

①日本中世仏教の思惟の典型となる文献の収集・読解。

②それを解釈するための新しい比較思想研究方法論に関する文献（海外のものを主とする）の収集・解読。

③それを基にして、海外学会で発表を行ない、意見交換をする。

４．研究成果

以下、まず年度ごとの成果を要約し、その後で、全体に関して本研究で得られた成果をまとめて示す。

【平成２４年度】

３回の研究会を開催し、日本仏教の比較思想的研究の可能性について討議した。

第１回９月９日（国際日本文化研究センター）――阿部泰郎、井上克人、永井晋、西平直、末木文美士の参加で、この問題に関して、自由討論を行った。とくに中世密教をどのように見たらよいかという問題をめぐって議論が活発に行われた。

第２回９月１０日（法蔵館）――前川健一、米田真理子、西村玲、藤井淳の諸氏の参加で、キリシタン文献『妙貞問答』について討論した。

第３回１２月２日（名古屋市博物館）――阿部泰郎氏他、１３名の参加で、同博物館開催の「大須観音展」を参観するとともに、それに関連する討論を行った。

以上のような研究会を開催するとともに、大須観音真福寺の調査を進め、２０１３年３月には、『中世禅籍叢刊』第１巻「栄西集」（臨川書店）を刊行した。これは、末木の責任編集で、栄西に関する新出資料（改偏教主決など）を多数収録し、従来禅僧としてしか見られていなかった栄西が、じつは密教に関して非常に重要な成果を上げていたことを明らかにした。このことは、従来仏教を哲学的に考えるうえで、純粋禅や浄土教を中心に見ていたことに対して反省を促し、密教をどのように組み込むかという重要な問題を提起することになった。

【平成２５年度】

(1)６月２０日に中国人民大学（北京）で行なわれた第５回中日仏学会議に日本側団長として参加し、「近代仏教――普遍性と地域性」と題して発表し、研究交流を行った。また、８月４～１０日、ギリシアのアテネで開催された世界哲学会議に参加して、The Other in Zen と題して発表するとともに、仏教哲学部門の責任者の一人として、司会を担当し、海外の研究者と広く意見交換を行った。

(2)Bernard Faure の英文著作 Unfolding Buddhism は、現代の観点から仏教検討し直し

た重要な著作である。そこで、若手研究者３名の協力を得て、本書の和訳試行版『仏教の仮面を剥ぐ』を作成し、それを印刷して関係研究者に配布して、意見を求めた。
(3)２０１３年７月に末木は『浄土思想論』を出版して、仏教思想の現代的意味を問う一端としたが、さらにそれを劉麗嬌氏（北京大学大学院）に依頼して中国語訳を作成し、中国語圏の研究者の意見を求めることとし、本年度は本書の前半部分の翻訳が終わった。
(4)前年度から引き続いて、大須観音真福寺（名古屋市）の調査を進め、神奈川県立金沢文庫（横浜市）他の所蔵資料とともに、『中世禅籍叢刊』編集作業を進めた。
【平成２６年度】
(1)昨年度から進めてきた『浄土思想論』の中国語訳が完成し、研究代表者（末木）がチェックした上で、印刷して関係研究者に配布した。
(2)末木著『仏教 vs.倫理』(筑摩書房、2006、増補版 2013）は、仏教を現代の観点から見直した比較思想的な著作であるので、その英訳をアントン・セビリア氏（総合研究大学院大学博士課程）に依頼し、内容検討の上で、印刷して関係研究者に配布した。
(3)前年度から引き続いて、大須観音真福寺（名古屋市）の調査を進め、神奈川県立金沢文庫（横浜市）他の所蔵資料とともに、『中世禅籍叢刊』編集作業を進めた。本年度は、「無住集」を出版し、貴重な資料を収録した。
【総括】
　以上のように、第１年度は研究会を中心とし、第 2 年度は海外学会での発表を中心とし、第 3 年度は代表者（末木）の著作の外国語訳の作成と印刷配布を中心にした。平成 25～26 年度は、勤務先である国際日本文化研究センターにおいて「日本仏教の比較思想的研究」のテーマで共同研究を組んだため、それと研究上の差別化を図り、共同での研究会開催などは共同研究のほうに委ね、本科研においては、その共同研究に属さない海外での発表や、代表者の著作の海外への普及に力を入れた。
　本来、5 年程度を必要とする研究であるが、代表者が定年退職するために、3 年間に縮小して行った。そのため、成果が十分にまとまった形にならず、個別的に留まったといううらみは残る。しかし、一方で、真福寺蔵書を中心とする中世仏教の資料的研究と、その出版の作業を進めるとともに、他方で、いくつかの口頭発表や論文において、中世仏教の思惟方法を現代の場で比較思想的にどのように捉えられるかという問題に関して、私見をまとめて発表することができた。後者に関して、いくつかの論文・口頭発表の要旨を以下に記す。
（1）「宗教間対話を可能とする理論を求めて」(2015 年、上智大学キリスト教文化研究所紀要）
　特に仏教とキリスト教の対話を日本という場で可能にするには、どうしたらよいかという問題を追求した。日本の伝統的な世界観は、「顕」（表に現れた世界）とともに「冥」（陰に隠れ、理性的な探求では理解できない世界）があるという二重構造になっている。このような世界構造の奥に深まっていくことが仏教では求められるが、キリスト教などの一神教的な「神」はこうした世界をさらに超越していくという相違がある。そのことを理解したうえで、対話の可能性を探る必要がある。
（2）「禅における他者」(2013 年、アテネにおける国際哲学会議発表）
　ここでは、禅の他者論を、西田幾多郎、久松真一、田辺元の哲学理論を手掛かりに考察した。西田の「逆対応」の理論が宗教一般の構造としての他者論を目指しているのに対して、久松と田辺の論は、仏教一般を念頭に置きながらも、禅の他者論の特徴を明らかにしている。禅は、ともすれば「己事究明」で自己の悟りのみ追求し、他者との関係が薄いかのように考えられがちであるが、以上考察したように、じつは他者との関係がきわめて重要な意味を持っている。久松が指摘するように、「絶対他者」であるブッダと、「絶対自者」である自己は、絶対的に隔絶していながら、一体化することができる。そして、それが実現するためには、田辺が指摘するように、師匠と弟子との具体的な関係が媒介しなければならず、そこに、生死を超えた実存協同が成り立つと考えられるのである。
（3）「近代仏教――普遍性と地域性」(2013 年、中日仏学会議）
　近代は西欧に発する価値観が普遍化して、非西欧地域にも及んだ。仏教もまた、その影響を免れなかった。そこに近代仏教の普遍性が生まれる。それは一方で伝統的なキリスト教に飽き足りない西欧の知識人に新しい視座を提供するとともに、長い伝統を持つアジアの仏教国に影響し、西欧化・近代化した形の仏教を普及させることになった。しかし他方、伝統のあるアジアの仏教にとっては、その伝統をどのように継承するかと意問題もあり、必ずしもすべてが西欧的な意味での近代仏教になったわけではない。日本の場合を考えてみると、一方で仏教の近代的言説が盛んになされ、清沢満之・鈴木大拙など、著名な思想家が生まれた。他方、日本の仏教教団は、国家の天皇を頂点とする家父長的社会組織の中に組み込まれ、仏壇と家墓を中心とする家族祭祀を担当する、いわゆる葬式仏教を展開させた。このように、日本の近代仏教は両面から検討する必要がある。
（4）「新しい哲学をめざして」(2012 年、福神）
　近代哲学の行き詰まりに対して、今日どのように新しい哲学を築くことができるのであろうか。例えば、アメリカの日本哲学の研究者トマス・カスリスは、従来の西欧の「自己統合型」（integrity）の人間観に対して、日本人に多く見られる「他者親密型」

(intimacy)の人間観がありうることを提示した。この理論は、エレン・マッカーシーにおけるケアの倫理学などに採用されている。こうした新しい研究を受けながら、伝統的な日本の思惟方法をさらに積極的に生かす道が考えられる。末木が提唱しているのは、上述のような「顕」（表に現れた世界）と「冥」（陰に隠れ、理性的な探求では理解できない世界）の重層構造によって世界を捉えるというものである。それによって、理性的な理解が不可能な「他者」、とりわけ「死者」も視野に収めた世界観、人間観が構築されるのではないだろうか。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
①末木文美士、宗教間対話を可能にする理論を求めて、上智大学キリスト教文化研究所紀要、査読無、33、2015、45-60
②末木文美士、死者と時間、宗教と倫理、査読無、14、2014、3-19
③末木文美士、栄西禅師と密教、禅文化、査読無、232、2014、14-20
④末木文美士、親鸞像の形成、東方学報京都、査読有、88、2013、221-243
⑤末木文美士、批判的思惟の有効性、日本の哲学、査読有、14、2013、94-109
⑥末木文美士、災害と日本の思想（韓国語）、日本評論、査読有、7、2012、17-45
⑦末木文美士、新しい哲学をめざして、福神、査読無、16、2012、102-114

〔学会発表〕（計３件）
①Fumihiko Sueki, The Other in Zen, World Congress of Philosophy, 2013 年 8 月 7 日, University of Athen（ギリシア、アテネ）
②末木文美士、近代仏教――普遍性と特殊性、中日仏学会議、2013 年 6 月 20 日、中国人民大学（中国、北京）
③末木文美士、脱魔術化と再魔術化、日本印度学佛教学会、2012 年 7 月 1 日、鶴見大学（横浜市）

〔図書〕（計７件）
①末木文美士、国際日本文化研究中心、浄土思想論、2015、110
②Sueki, Fumihiko, International Research Center for Japanese Studies, Buddhism vs. Ethics, 2015, 196
③末木文美士、サンガ、草木成仏の思想、2015、261
④阿部泰郎、末木文美士、高柳さつき、米田真理子、和田有希子、臨川書店、中世禅籍叢刊 5、2014、536
⑤末木文美士、春秋社、浄土思想論、2013、241
⑥末木文美士、米田真理子、稲葉伸道、牧野敦司、和田有希子、臨川書店、中世禅籍叢刊１、2013、581
⑦末木文美士、新潮社、現代仏教論、2012、239

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
末木　文美士（SUEKI, Fumihiko）
国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号：90114511

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
阿部　泰郎（ABE, Yasuro）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号： 60193009

司馬　春英（SHIBA, Haruhide）
大正大学・文学部・教授
研究者番号：90338591